

乳幼児の教育は大丈夫か!?

東洋大学経営学部 非常勤講師

公益財団法人 日本進路指導協会 理事・調査部長

千葉吉裕

小学校の新生児に、異変が起こっている。語彙の乏しい児童が増えており、児童間の語彙量の差が大きく広がっているというのだ。語彙の乏しい児童が、特別な支援を要する知的障害者ではなく、ごく一般的な、いわゆる普通の児童だそう。

この問題は、深刻な問題だと教育関係者の間では捉えられている。語彙の乏しい児童は、日常の人との関わりや授業に支障をきたす可能性がある。自分の思いや考えを伝えたり、人の考えを理解したりする上で、言葉は重要である。語彙が少なければ先生の話を十分に理解することができないため、小学校での学習に支障をきたし、小学校の中学年以降、生涯にわたる知能の成長に影響することが心配される。

言うまでもないが、言葉の獲得は、非常に重要だ。物を考える時や黙読する時、声に出さないまでも言葉が用いられている。言葉なしに、考えることも、判断することもできない。今、この文章を読んで頂いている皆さんも、内容を理解できるのは、言葉を理解しているからだ。文章を読む脳のしくみは、目を使って視覚で捉えた映像を言葉として認識し、脳の中でその言葉を聴覚情報に変えて、変えた聴覚情報を、文法的に解釈したり、そこに書かれている文字の意味を、これまでに体得した知識と瞬時に結びつけて解釈すると

いう高度な機能を使って理解をしている。言葉なくして、意味を理解することはできない。

では、私たち人間は、どのように言葉を獲得したのだろうか。誰しもが生まれた時には、言葉を理解することも話すこともできない。そんな赤ん坊が成長発達するにしたがって、聞いて理解できるようになり、そして、話せるようになり、いずれ読めるようになり、書けるようになっていく。一見、意識することなく、自然にできるようになっていくように見えるが、その発達成長を促す「環境」があり、支援する「人」の存在を忘れてはならない。

乳幼児の周りで交わされる会話や、乳児に話しかけたり、五感で感じたものを言葉で表現し伝えたりしていかなければ、乳児は言葉は獲得できない。そして、乳児から幼児に成長すると話ができるようになり、トライ＆エラーを繰り返して、だんだん会話ができるようになっていく。ゆっくり、明瞭に、短く、簡潔に、幼児に話しかける親と、話しかけた言葉を発話する子どもとのやりとりは街中などでもよく見受けられる光景だ。これは、幼児にとって、言葉を獲得するための重要な学習となっている。特に脳の成長には臨界期(critical period)と呼ばれる、その時期を過ぎると身につけることができなくなる限界の時期があるとされる。

0歳～4歳に臨界期を迎えるとされるものが多く、言語の習得の臨界期もこの時期にあると言われている。人間にとってこの時期の教育は非常に重要だ。

近年、少子化、核家族化による家族の変化、地域社会の変化、情報端末を通じたコミュニケーションの拡大、遊びの変化、家庭での過ごし方の変化など、乳幼児を取り巻く環境は著しく様変わりしている。果たして、子どもたちは適切に育っているのだろうか。語彙の乏しい児童の増加は、乳幼児の教育の実態をあらわす象徴的な出来事であるならば、由々しき事態である。

新学習指導要領では、語彙指導の改善・充実を求めている。小学校低学年では、身近な語彙を、中学年では、様子や行動、気持ちや性格を表す語彙を、高学年では、思考に関わる語彙を日常生活の中でも使いこなせるよう増やすよう示している。果たして、幼稚園や小学校で、乳幼児期の不足を補うことができるのか不安は残るが、大変重要な方針だと思う。学校教育では、このように教育をコントロールできるが、家庭教育をコントロールすることは非常に難しい。乳幼児を育てている家族や、将来親になる人々に、この危機を共有できれば幸いだ。そこから、新たな家庭教育のムーブメントが起こることを期待してやまない。